アタッチメントの問題を抱える子どもへの特別支援学校における指導支援

学籍番号（209303）
氏　　名（川上　真由紀）
主指導教員（上田　裕美）

１．背景

1.1 研究の背景と研究の目的・方法

筆者の勤務校であり実習校でもある知的特別支援学校には、これまでの養育環境や養育者との関係性からアタッチメントの形成に問題を抱え、不安定な心理・行動面の特徴を示す子どもがいる。筆者はここ数年こういった子どもへの対応において今までの指導・支援では対応しきれないと感じる場面があった。そこで、他の教員はアタッチメントの問題を抱える子どもたちをどう理解し、どういう指導・支援をこころがけているのかを知り、これまでの筆者の実践を相対的な視野の中で省察し直し、今後の実践に生かしたいと考えた。

本研究は、アタッチメントの問題を抱える子どもへの特別支援学校における指導・支援のあり方について考察することを目的とする。なお、継続・一貫性のある子どもへの関わりという観点から小学部・中学部のつながりを意識した引継ぎのあり方についても検討した。研究方法は、インタビュー調査の語りから質的に分析を行い、ボウルビィ（Bowlby, J）（1969/1982）が案出したアタッチメント理論を参考にして考察した。

２．アタッチメントの問題を抱える子ども理解

アタッチメントの対象は、恐怖や不安などの心的苦痛を低減させる「確実な避難場所」であると同時に、安全・安心感を回復させたあとは、積極的に探索に出ていくための「安全基地」として機能する必要がある。藤岡（2008）を引用し、本研究におけるアタッチメントの問題を抱える子どもの定義を「アタッチメントの形成に問題を抱え、愛情の表現・心地よさの追求・援助への信頼・協働・探索行動・コントロール行動・再会場面での反応に課題が見られ、情緒や対人関係の問題が生じている子ども」とした。

３．指導・支援の聞き取り

小・中・高等部の教員の心がけている指導・支援の把握と、指導・支援のあり方について考察することを目的として、小・中・高等部の教員、3 名ずつ計 9 名にインタビュー調査を行った。木下（2007）の修正版グランデッド・セオリーアプローチの分析方法を参考に整理した。

４．結果と考察

心がけている指導・支援について分類したところ、10個の概念が抽出され、積極的なコミュニケーション、身体接触を伴う関わり、受容的な関わり、自己解決に向けた関わり、自尊感情を高める、環境と人の調整、保護者を補うの7つのカテゴリーに統合された。教員が心がけている点は以下のように整理された。不適切な行動のシグナルを理解した上で、行動の修正を図ること、子どものネットワークを拡大させていくという視点を持つことが重要であると考えられた。また、身体接触を伴う関わりから言語的接触に移行していくことも大切である。更に、子どもの痛みをケアするという視点を持ち、受容感を育むことが求められる。子どもの感情を汲み取り、反映するような言葉かけや、感情表現や感情制御を促すことも自己解決に向けた関わりとして求められる。更に、子どもが自己選択できるよう支援し自律を促すことや、行動を振り返る機会を持ち内省機能を高めることも重要である。子どもの特性を具体的に褒め、合わせて教員の感情も伝えることは、自尊感情を高める関わりとなる。教員集団としては、子どものシグナルに適当な教員が適切に応答できるよう、共通意識や理解を図り教員間で役割分担を決め連携することが求められる。

カテゴリー間の関係を検討し、図１を作成した。教員は子どもが安全・安心感を回復させ、探索、自律に向かえるような「安全基地」機能を果たそうとしている。そのために、環境と人の調整が基礎となる。教員は、子どもの心の痛みに寄り添い、安全・安心感の回復を図る「ケア」、教員から手をさしのべ、子どもが探索に向かえる支えとなる「支援」、子どもの自律に向かって導く「指導」を心がけており、それらは子どもの状況によって関連・影響し合っている。子どもはこのサイクルを繰り返すことや、行ったり戻ったりしながら教員を安全基地として利用していく。

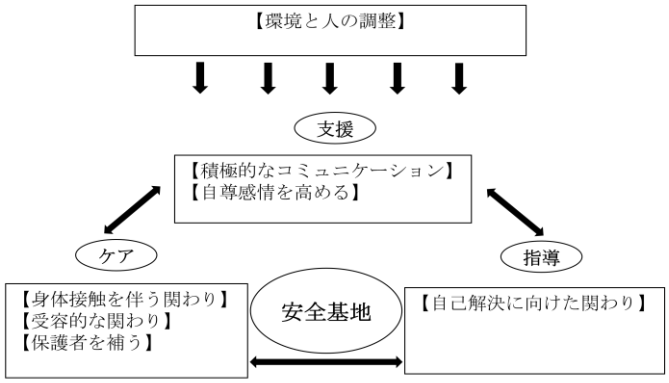

図１．カテゴリー間の関係

５．つながりを意識した引継ぎのあり方について

小学部から中学部の引継ぎにおいては、子どもの安心感を引継ぐという視点と、新たな環境で子どもの安心感を広げるという視点を持つことが重要であると提案した。

６．総合考察

アタッチメントの問題を抱える子どもには、指導・支援だけでなく、ケアが欠かせないということが分かった。スクールカウンセラー等の専門家と連携することが求められる。